

知らなかつたのか?
美少女に催眠はあんま
効かない。

夜桜さくら

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ぼくのことを好きになつて！」

催眠で、恋人を作つた。

クラスの中の美少女とぐへへな日々がはじまるぜ！ と期待に胸を膨らませていた
のだが……？

「清潔感がない。新しい服買つたら？ てか目線がエロい。胸みないで。きもい。人に
会うならもうちよつと気を遣つてよ……有り得ない」

「……わかんないなら、私がとりあえずコーデしてあげるから」

「…………」

いや好意は抱かれてるっぽいけどなんでこうなる
思つてたのと、なんか違う!!!!
????

ねえこれ催眠効いてる？

効いてない？

目
次

ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

「清潔感がない」

バツサリと僕の服装に駄目だしをしたのは、凄く可愛い女の子だつた。
つややかなセミロングの黒髪、ぱつちりとしたアーモンド形の目、柔らかそうな唇。

髪を束ねる鮮烈な赤のシュシュが印象的だ。

「まず、伸びた服着るのやめて。首元よれよれ。 というかなんかシミついてる。……髪

も、せめて寝ぐせくらい直ってきてよ」

はーあ、と大きなため息を吐いた姿まで様になつている。凄いなど、少し現実逃避し

ながら思いつつ、「ごめん」と一言謝る。

けれどそれも悪手だったようで、彼女の目がキリリと吊り上がる。

「すぐ謝るのやめて。もつと、堂々としていなさい。背筋伸ばす！」

「は、はい！」

よろしい、と彼女が頷く。

「じゃあ、とりあえずショッピングね。服、選んであげるから」

ぼくが、催眠アプリで恋人にした女の子が、唇を尖らせて言つた。

1 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

ツンなのかデレなのかいまいちよくわからない、この現状。

「なんでこうなつてるんだ……」

「なにか言つた？」

「……いや」

なんか思つてたのと違う。

ぼくは、自分のスマートフォンを見下ろして、そつと嘆息を吐いた。

◇ ◇ ◇

それはいつも通り、教室の片隅で一人スマートフォンを触つて遊んでいたときのことだつた。

今晚使うエロ画像を選出していたら、誤タップ。

何か妙なアプリのインストールが始まった。

(やつつつつべー!!)

どうしたものかとあたふたしているうちに、インストールが終わり、そしてスマート

3 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

フォンには「催眠アプリ」と書いてあるアプリが新しく入っていた。

ひとまず安全な対処法は何かないとネットの海で情報を探すも、優秀な工口ネタが集まるだけで類似した例は見当たらなかつた。

思考を停止した末に、アプリを起動。

焦りのせいか、馬鹿のせいか、はたまたアプリに秘められた魔力とでも呼ぶべきもののか。

使つてみよう、などという考えに至るのにそう長い時間は必要なかつた。

赤嶺さゆり。

いわゆる学校にひとりはいる美少女という奴。

才色兼備。

勉強ができる、友達が多く、常にクラスを華やかにしている。

おっぱいも大きい。

性欲あふれる男子高校生たちが、さぞ夜のお供にしていることであろう。

やつぱり催眠かけるならこういう子だよな、ということで、放課後校舎裏に来てもら

うよう手紙を出した。

女の子の下駄箱にものをいれるなんてはじめてで、どきどきしたのはここだけの秘密だ。

そうして、放課後。

大きなケヤキの木の下に立つている彼女のあとへ、ぼくは歩いて行つた。
ぼくの足音に気付いた彼女が振り返り、目が合う。

「や、やあ」

「……手紙くれたの、佐藤？」

柔らかな笑みを浮かべながら、彼女は可愛らしく首を傾げている。

ぼくはどきどきしながら頷いて、「見てほしいものがある」と言つた。

「見てほしい、もの？」

「これっ」

ぼくはさつと自分のスマートフォンの画面を、彼女の眼前に突き付けるように差し出した。

催眠アプリの使用方法はとても簡単。

画面を相手に見せるだけ。

心臓を高鳴らせながら、ぼくはおそるおそる、彼女の顔をのぞきこんだ。

5 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

「…………」

ぼう、としていた。

自失状態。

まるで別の世界を観てているように目の焦点が合っておらず、手を目の前で振つても反応しない。

(やつた！ 成功した！)

正直半信半疑で、失敗しても構わないと思つていたのだがこれは儲けものだった。

これからどうしてやろうか、と邪な妄想が頭にあふれてくる。

しかしまあ、とりあえず一番最初にすることは決まつっていた。

どろどろとした性欲の原初とでも言うべきもの、性に芽生える前からずつと思つていたこと、子供のころからなんとなく夢見ていたこと。

恋人がほしい。

そんな、ありふれた願い事。

「“ぼくのことを好きになつてつ”」

言つてから、恥ずかしいことを言つたなあと顔に血をのぼらせていると、彼女が動き始めた。

ぱちくり、と目を瞬かせて。

目が、合つて。

彼女の顔が、ボツ、と赤く染まつて。

「え、ええええええ」

壊れた機械のように、声を上げる。

「え、えつと……」

「え、何。てか近い近いつ！」

彼女の顔を覗き込んでいた関係上、確かにいささか顔と顔の距離は近かつた。
顔を真つ赤にしながらあとずさりする彼女を見て、ぼくは確信する。

(催眠が、効いてる――！)

どつどつ、と期待で心臓が高鳴りだした。

「――おっぱい、さわってもいい?」

思わずそんな言葉が口からこぼれ出て。

「え、いや無理」

彼女が、先ほどとは全く別の理由で、また後ずさる。

胸をかき抱くその振る舞いと表情からは、嫌悪の情が垣間見えた。

「え、どうして」

「いきなりそんなこと言われるの、怖い。私たち、別に付き合つてもないのに……」

「あ、そうか」

ぼくは得心する。

そういうえば確かに、催眠をかけた文言としては“ぼくのことを好きになつて”であつて奴隸になれでもないしほくの言うことをすべて聞くわけではないのかも知れない。じゃあ、と短絡的に考える。

「えと、じゃあぼくと付き合つてください……」

「…………不正解」

「えつと、だめつてこと？」

「…………ダメじゃない、けど」

「やつたつ」

「い、いいけど。すぐえつちさせてとか、だめだからね？　こわいんだからね？」

「うん。わかつた。そういうことは言わない！」

「じゃあ、えつと。よろしくお願ひします……？」

「よろしく！」

顔を赤らめたまま、「ムードがない……不正解……」とぼやく彼女は大変可愛かつた。

この子が今日から恋人だと思うと、テンションが爆上がりである。
ぼくは、リア充になつた。

なつたはずだつた。

最初は良かつた。

クラスの中では会話をしたり一緒に下校したりなんかしちやつたりして、周りが茶化してきたり、付き合つてると言うと驚かれたりしたりまあなんやかんやそれもまたそれで心地よかつたりした。

だが。

そんな甘酸っぱい光景はそう長くは続かなかつた。

「えと。いまなんて言つたの。聞こえなかつた」

「……もつかい言つてくれる?」

「声が小さくて聞き取りづらい。はつきり言つて。そういうの、相手に失礼だよ」

「…………あのね。会話する上で、相手に聞こえるようにしゃべるつてのは最低限の礼儀なの。ぼそぼそしゃべつてないで、もつとはつきり声に出して。あとどもるのも印象悪い。言いたいことははつきり言つて。いちいち他人の顔色を窺わない」

月日が流れ、共に過ぎる時間が増えるほど、彼女はぼくに辛辣になつていつた。

9 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

これはなにかおかしいのではないか、と催眠アプリを確認するも、どうにもアプリの画面は正常なようを感じる。

そしてついでに気付いたが重複して催眠はかけられないらしい。
試しに「犬になつて」とアプリを見せながら頬んでみたけれども、「ヤダ」と一蹴されてしまつた。

操作説明などが特ないので手探り状態だが、いかんせんとりあえずはこの状態を維持するしかないなーと思いつつ、辛辣な彼女との恋人生活を送つていた。

まあそんなこんなで——冒頭に戻る。

「ま、待つてよさゆりさん」
「どころかいなあもう……」

つかつかと先行するさゆりの後を追つて、歩き出す。

待つて、と言えば待つてくれるし、歩くスピードがゆっくりになるあたり、やはりこ

の子は優しいなど頬を緩める。
「どうかしたの、にやにやして」

「さゆりさん可愛いなと思つて」

「……あ、そ」

ふい、と顔をそむけて、また少し歩くのが早くなる。

ぼくは少し足を早めて、さゆりさんはわかりやすいなあと笑ってしまう。

「……」んな可愛い彼女と歩くんだから、ちゃんとしてよね」

少し間をおいてから彼女は、きつ、とこちらを睨みつける。

「うん。でもとりあえず、そういうのよくわかんないから教えてくれ」

「……まあ、いいけど」

はあ、と彼女はまた小さくため息を吐く。

お小言をもらわれながらアパレルショップまでやつてきた。

「ところで、進くんつて服の趣味とかあるの？」

「ない！」

「もうちよつとちゃんと考えて
いやそんなこと言われても……」

例えばこれとか？ と着心地のよさそうなスウェットを手に取る。

彼女は「……不正解」と大きなため息を吐く。

「……部屋着としては悪くないけど、それ、うん。いや別にスウェットが悪いって言つてるんじやなくて。私だって着ることはあるし、ただ、それは室内用なんだよね……」

「そうなのか」

「そうなの」

「何がどう違うの？」

「……説明するのめんどい」

「そつか」

「知りたいか知りたくないで言うとどつち」

「え。いやうん、どつちでもいい……？」

「不正解。いまはどつちって聞いてるんだからどつちか答えて」

「えと。じゃあ知りたい」

そう答えると、つつけんどんとした態度のまま彼女はつらつらと話し始める。

形がどうの、生地がどうのと。

あまりよくはわからなかつたが、服にはある程度綺麗に見える形があるらしいとかどうとかいう話だつた。

なんかもうスウェット関係ないなと思いつつ、話を聞く。

「まあ、とりあえず、ボトムスかな……」

「ボトムス？」

「とりあえずスタイルよく見せるには下半身だからね」

「へー」

棚からボトムスを出して、「ウエスト何センチ?」「とりあえず試着してみよ」「は?

試着したことない……? そんなひといるんだ」「細いほうがいいの。ゆつたりしてるとモサつと見えちゃう」やらなんやら、会話をしながら試着をしたりなどした。

「……まあ、こんなもんかな」

「おー。さすが。で、どれ買えばいいの?」

「んー。まあ別にこのお店のでもいいけど、もうちょっと他のも見よ。このモール、あと三、四件はメンズのお店あるし。というかトッピスも見たいし」

「え?」

「ほらさっさとして」

「あ、うん」

そうして先ほどと同じように店内を見て歩いて、「お店によつて結構置いてある服の感じ違うでしょ?」「どこのが一番好き?」「というかいくら持つてる? 財布事情考えてなかつた」「お昼^ごはんどこで食べよつか」などなど適当に会話をしながら、歩いていた。

「…………」

「……疲れたの? 体力ないなあ」

13 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

「いやまあうん。こんなに長いこと買い物してるのはじめてで」

「買うつて決めてるもの以外、何も見てないんでしょ」

「いやうん。なんかごめん」

先ほどまで比較的穏やかそだつたさゆりの目が、キリリと吊り上がる。
それを見てぼくは、あわてて言葉を付け足した。

「（）——ええと、すぐ謝るのはやめます。まだ慣れてなくて、つい」

「……ん」

どうやら対応としては間違つていなかつたらしい。

吊り上がつた目が下がり、しゅん、と彼女が大人しくなつた。

少しばかり気落ちしているようにも見えて、ぼくはどうしていいかわからず口ごも
る。

「“すぐ謝るのやめて”つて言つたの。ちゃんと聞いてたんだね」

「え、いやうんそりや怒られたし」

「うん」

やつぱり、ときゆりは宙を見つめて呟いた。

そして、ぼくに向きなおり、今日一番の笑顔で「次あつち行こう」と指をさす。

「ちんたらしないでつて言つたでしょ。ほら早く」

「ええ、まだ歩くのか……」

「途中で休憩はするからだいじよぶだいじよぶ。まだまだ前半戦だぜー」

「前半……?!」

「おうよー」

前半……もう一時間以上経っているのに、まだ前半の途中……。

(女の子の買い物が長いって、漫画の中だけの話じゃなかつたんだな……)

なんだか口調も不思議な感じになつた彼女に、ぼくはうなだれてついていくしかできなかつた。

とりあえず彼女のコーディネートに従つて服を買い、そのまま試着室で着替えて、デートを続けていた。

服なんてものには興味の欠片もなかつたが、「悪くないかな」とにこにこされると、そろ悪くない気分である。

飴と鞭というのはこういうことか、と怒つたり笑つたりする振れ幅が物凄く大きい彼女を見て思う。

「さすが私。センスいい」

15 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

「さゆりさんはセンスがいい」

繰り返すように、彼女を褒める。

適当に口にしているだけでも、彼女は少し上機嫌になつてくれていた。

こういう表面だけの言葉というのは、『作つた』言葉ではあるがそれで関係が上手くいくならそれでいいのかな、と彼は思つて。

これが、相手に合わせるということなのかな、と漠然と感じたのだつた。

何気にデートをするのはこれがはじめてなので、丸一日フルタイムで接していると、今まで見えていなかつた部分が見えてくるものだつた。



最初はカツプルだしなあ、ということで学内でも頻繁に話しかけていたものだが最近はめつきり会話をしない。

いわく、「私にも人間関係つていうのがあるから、それを乱さないで。……めんどくさいから直球で言うと、学校では話しかけるな」とのことだ。

まあ話しかけるなと言われて話しかけるほど命知らずではないというか、彼女は自分の意に沿わない行動をぼくがしようとすると大変怒るので、仕方ないかなという感じだつた。

「佐藤氏がリア充になつてから三ヶ月。どうなることかと思いましたが、特にお変わりはないようですな」

一応、さゆりさんに言われて髪とかもいじくつてるんだけどなど、ぼくは自分の前髪に触れる。

けれども、はたから見たら別にそんなに変わらないのか、とガツカリしてしまふ。「ブヒ太郎くんは変わんないね」

「ブヒヒ。それほどでもないですゾ！」

ポチポチとスマホをいじくりながら、ぼくは友達のブヒ太郎くんと話していた。日陰者同士、というとアレだが、まあ実際そんな感じの連れ合いというかシンパシーを感じるのは事実。

まあまあ気が合うのでクラスの中ではよく話している。

「佐藤氏佐藤氏。ちょっとお伺いしたいことがあるのですがよろしいですかな？」
「なに？」

「ここだけの話、どうやつたのですかな？ 普通に考えて、佐藤氏が赤嶺殿と付き合うな

どあり得ないでござろう？」

「まあそうかもね」

「運命的な出会いがあつたんだよ、とか言うのもめんどくさくて、適当に相槌を打つ。「おや、認めるのですかな!?」

「いやてかうるさいよ。みんなこつち見てるよ」

「話を逸らさないでいただきたい！」

実際変なことをしていいる手前、後ろめたさがあった。

だけど、さゆりさんもいるクラスの中であまりそうした会話をしたくなくて、ぼくの口調に苛立ちが混じる。

——そういうの、相手に失礼だよ。

「ブヒ太郎くん。その言い方は失礼だよ」

思わず、さゆりさんがぼくに言うように、話していた。

それに気付いて。
ぼくは。

失礼なのはどつちだよ、と惨めになつた。



窓の向こうに飛行機雲が流れていた。

喫茶店の中でぼくは、ぼうとそれを目で追つて、それを作る飛行機を見つけようと見てだけど見つからなくて。

「ねえ聞いてる？」

「……え。うん」

だから少し、反応が遅れてしまつた。

対面に座る彼女にあらためて視線をやると、いつも通り、キリリと目が吊り上がり唇を尖らせていた。

「不正解」

はあ、とさゆりはいつも通りにため息を吐く。

「話聞いてなかつたでしょ」

「はい」

「適当に相槌するのやめてよね」

「はい」

19 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

まあいいけど、と抹茶ラテを口にする。

「抹茶つて凄い無難に美味しいからずるい」

「苦いのと甘いのを組み合わせる感覚がぼくにはわからない……」

「カフェオレとかも飲めないの？」

「いやカフェオレは飲める」

ふーん、と。

可憐に嫣然に朗らかに。

「飲めんじやん」

笑みを浮かべる。

ぼくは彼女がときおり浮かべる、この笑みが好きだった。

「いつも思うけどさあ

「うん？」

「進くん、よく私と一緒にいていやにならないよね」

「エ？」

あまりにも想定外な台詞に、素つ頓狂な声が出た。

「なにその声」

くすくす、と彼女が笑う。

「いや、え？ なんで？」

「なんであつて、いつも私、進くんのこと馬鹿にしてんじやん。 いまだつて、『何その笑い声～』つてさ。 嫌になんないのかなつて」

「……？」

「何」

「いや……」

頭がまだ回らない。

「だつて、さゆりさんはほんとぼくのために言つてくれてただけじやん」「……」

「『そういうのは人に悪印象を与えるからやめたほうがいいよ』——つて、だいたいそういう感じだつたでしょ」

「……ふうん？」

笑みを浮かべていた彼女は、眉根を寄せはじめた。

何か気に入らないことがあるのか、とぼくは少し困惑しながらも、言葉を続ける。

「というかそもそも、それを言うならこっちの台詞なんだよね。いつもぼくのそういうところ注意するけど、それ、嫌にならぬのかなつて」
言いながら、ずるい言葉だなと思つた。

そんなのも含めて「好きになつて」と言つたのはぼくなのに。

「そりや」

だけど、返ってきた台詞は、思つていたものとは違うものだつた。

「嫌に、なるよ。いつも俯いてたし声小さかつたし服もダサかつたし髪も妙に長かつたし何言つてるかわからなかつたしやりたいこともわからなかつたし……ホント、意味わからなかつた」

好意を植え付けたはずなのに、返ってきたのは“嫌”だという言葉。
それがまず意外で。

「でもまあ、なんか好きなんだよね」

そして嫌いだけど好きという言葉が。

当たり前のその現実が、胸に、突き刺さつた。

結局自分は、相手の心をもてあそんでいるだけなのではないか、と。

「……」

「どうしたの」

「いや……」

「変なの」

けらけら、ときゆりはおかしそうに笑う。

「あ、雨だ」

「……ほんとだ」

しばらくここで雨宿りだね、と笑う彼女の顔を、ぼくは直視できなかつた。

「不正解」

と、彼女が言つた。

「え、なにが？」

「なんで傘二本買つてきちやつたのかなあ、つて」

「え？」

「相合傘、一回やつてみたかつた」

ふふ、と笑みをこぼす。

「冗談だよ。ありがとう」

ぱしやり、と。

水たまりに足を踏み入れる。

屋根の外に一步足を出すだけで、足は濡れるし雨粒が傘を叩く。

23 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

とんとんとん。

ぱしやばしやばしや。

そんな音を立てながら、ぼくたちは歩いて帰った。



陽の光が燐々と降り注ぐ休日。

ぼくたちは自然公園へと足を運んでいた。

映画やらカラオケやら、学生が気楽に行ける場所というのはあらかた足を運んでいて、恥ずかしいながらお財布的に来れるのがこういうコストの安い場所が多くなつてしまふという現実がある。

この場所は以前にも一度足を運んだことがあり、今日で来るのは二度目だつた。

前に来たのは暑い夏の日だつた。

太陽の光の具合も、燐々と——などという可愛らしいものではなく、灼熱のという形容が似合いそうな熱くて暑い日だつた。

汗をかいて、まあ正直ここはナンセンスだつたなど自分では思つたものの、意外とさゆりに好評だつたことだけは覚えている。

「うわ涼し。いや別に今日も涼しくはないけど、あつたかいけど、暑くない！　いい天氣」

「そうだね」

真っ白なカットソーの上に薄手のカーディガンを羽織つたパンツルック。

散歩しやすい簡素な恰好をした彼女は、今日もやつぱり可憐だつた。

「行こうよ。歩こう」

「うん」

歩く以外することないんだけどね、と笑う彼女に、ほんとそなんだよな、と頷きながら歩き始める。

「なんだかんだ広くて、前地味に迷つたよねえ」

「いやほんと広いよね。また迷う気しかしない」

「ちゃんとエスコートしろー」

「……園内マップ、撮つて来てもいいですか」

「はやくしろー」

きやつきやと騒ぐ彼女を置いて、少し先にあるマップのもとへと足を進める。

25 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

まあ見ればいいかと簡素に写真を撮つて、振り返るともういない。

「…………あれ？」

飲み物でも買いに行つたのかな、と入り口のさらに入り口のあたりを思い浮かべる。確か、あそこには自動販売機があつたはず。

「うーん」

エスコートちゃんとしないとまた怒られるなあ、などとぼんやり考えて、まあとりあえず端末から「どこいるの？」とメッセージを送つた。

すぐに、「探してみて」と返事がきた。

「…………いた」

「わ、早い」

「いやていうか隠れる気なかつたでしょ」

「でも最初見失つてなかつた？」

「……」

「視野がせまーい」

「むう……となると、「ごめんごめん」と彼女がけらけらと笑う。

「いこ」

「はいはい」

「『はい』は一回」

「はーい」

「伸ばさない」

「うつす」

「ぶつ飛ばすぞ」

「言葉遣いが荒い」

「わかるー」

まず最初に向かつたのは、薔薇園だった。

多種多様な薔薇が集まっているその道は、見るからに華やかだつた。

「きれー」

「そうだねえ」

「思つてもないことを」

「いや想つてるよ?!」

「ほんと?」

「うん」

じゃあ、とさゆりは照れたようにして口にする。

「薔薇と私、どつちが綺麗？」

「……」

「おい」

「照れるくらいならそんなこと聞かなきやいいのにと思って」

「不正解が過ぎる……」

む、と眉根を寄せて、彼女は拗ねたように歩き始める。

「相変わらず可愛いね」

「……正解」

「それはよかつた」

次に向かったのは、蓮の池。
大きな大きな池があつた。

「蓮ないねえ」

「ええと。もう散つたあとかな」
「え、なんでここに来たの」

「何でと言われても流れで、としか」

エスコートがなつてないなあ、と彼女はぼやきながら、けれどその表情は朗らかで、うつとりした様子で水面に視線を向けていた。

「今から恥ずかしいこと言うから笑わないでほしいんだけど」

「何」

「光が反射する水面って、宝石みたいだよね」

「……あー、なるほど」

「わかる?」

「うん。きらきらしてる」

「ふふ、正解」

ただの水溜まりを見て綺麗だと感じるその目線は、自分にはないもので。

水光の宝石を見て笑みを浮かべる彼女を見て、ぼくはその眩しさに目を細めた。

「前に来たときから思つてたんだよね。宝石みたいだつて」

「あ、そうなの」

「うん」

池に落ちないよう立てられた柵に寄り掛かり、彼女はぼつりぼつりと言葉を紡ぐ。

「言つたら笑われるかなと思つて、前は言わなかつたんだよね」

「別に笑わないのに」
「知ってる」

今はね、とさゆりは付け足した。

ぼくはそれを聞いて喜ぶべきなのか悲しむべきなのかがわからなかつた。

ただ一つ確かなのは、その好意は植え付けたものなんだよなという罪悪感だけだつた。

ハーブ園。

ぶつちやけ見た感じだと雑草と何も変わらないのがハーブである。

いやまあ花が咲いている種もあるし、華やかさがないとは言わないが、それ以前に訪れていた薔薇などとは比べ物にならない地味さだつた。

「んーっ」

だけれども、さゆりは満悦である。

「こういう、ちっちゃい花もいいよね」

「そうだねえ。……あ、ジャスミン茶売つてるけど、いる？」

「いる」

前も売店を見てテンション上げてたなあということを思い出しながら、ジャスミン茶を買い求めに行く。

るんるんと弾んでいる彼女は、まあ草木が好きで散歩が好きとは言つても、やつぱりこういうお茶やら口で直接味わうものが好きなようだつた。

「んー美味しい」

「ジャスミン茶好きだねえ」

「普段別に飲まないのは知つてるでしょ。こういうとこだと飲みたくなるじyan」

「まあ、そうね」

「向こうのベンチ行こ」

「はーい」

並んで座つて、軽く乾杯。

乾いたのどを潤した。

二人の肩は触れ合はず、されど二人の影は重なり合う。

そんな距離で、足を休めた。

「あ、トイレ大丈夫?」

「不正解。聞き方がナンセンス……」

並木道を、歩いていた。

ただ両脇に木々が並んでいるだけの道。

だけれども、普段目にするよりもはるかに緑の量は多く、これだけでもひどく非日常だつた。

空からそそぐ陽光は木々の枝葉に遮られ、木漏れ日として煌めいていた。

「木漏れ日ってなんか凄く綺麗だよね」

ただの太陽の光でしかない。

「なんというか、普通の明かりとはちょっと違う感じ」

それはたぶん元気なひとを見ても足を止めないが、儂く消えてしまいそうなひとが腰かけていると足を止めてしまうのと同じこと。

弱さの中の美しさ、儂い美しさは、人の目を惹き付ける輝きを持たないまま、ごく自然に人の足を止める。

惹き付ける強い美しさではない、自然と足を止める儂い美しさ。

「足を止めたからはじめて気付いた綺麗なものって感じが、凄く好き」

「そうだね。凄くわかる」

彼と彼女では、美しいと思うものは決定的に違うだろう。

彼女は木漏れ日の優い輝きに惹かれた。

彼は活発で明るく鮮烈な太陽に惹かれた。

ただ美人で可憐で清廉だつたというのが切っ掛けなのは事実だ。自分には決して手の届かない高嶺だつたから、引きずり下ろす魔法が、奇跡が、手に入つてしまつたから使つたというただの愚かな男の話。

だからまあ、清算をしようと思つていた。

罪滅ぼしにもなんにもならないけれど、もう、終わりにしようと思つていたのだった。

最後は彼女が一番楽しそうにしていたこの場所で、と。

「？　どうしたの？」

さゆりは、自分の携帯端末をじつと見つめる彼を見て、眉をひそめる。

いい感じに浸つてたのに、何をしているんだろうと。

少し離れていた距離を、彼女が詰めようと足を踏み出した瞬間、彼はアプリを削除し

た。

削除。

もう二度と、心をもてあそぼうだなんて思わないように。

33 ねえこれ催眠効いてる？ 効いてない？

さゆりは、胸に手を当てた。

何かがなくなつたような気がした。
いや、気のせいではなく、なくなつた。
ああなるほど、と。

彼女は納得した。

だから、

「何か言うことは？」

いつも通りキリリと目を吊り上げて、彼女は慄然とした表情で言つた。

「え、と……」

「何か、言うことは？」

「ごめんなさい。あの、ほんとに——」

「不正解」

謝罪の言葉を口にしようとして、即否定される。

「どうか、前も言つた。すぐ謝らないで。謝つて済む問題じやないならなおさらだ。
……一回ヤダからやめてつて言つたら、やらなくなるのが進くんの良いところなんだけ
どな」

前半の鮮烈さとは打つて変わつて、後半の口調の柔軟さは彼をずいぶんと驚かせた。
その不透明な透明は、真意を彼に悟らせず、どうしていいかがさっぱりわからなかつた。

だけどはつきりしているのは、こんなときでも彼女は変わらないなということで。
それは、催眠をかけていようがいまいが、彼女の真実は変えられてはいなかつたといふことで。

それが凄く嬉しくて、涙が出た。

「え、いやちよつと。なんでいきなり泣いてるの」

つつけんどんとした態度が瓦解して、さゆりはあわてて彼にかけより、「大丈夫?」と肩をゆすつた。

「ごめん」

「だからそういうのはいいって」

「ごめん……ごめんな……」

「謝るくらいならはじめからそんなことしなければよかつたのに」

全部わかつたような口調で、彼女は彼を諭すように撫でる。

彼の嗚咽を聞きながら、「かつこ悪いなあ」と花咲く笑みを浮かべていた。

「……好きだ」

「うん」

「綺麗だ」

「ありがとう」

「世界で一番可愛い」

「それは言い過ぎ」

まあでもわからなくもないけど、と彼女はまた笑う。

「私も好きよ。なかなかのレベルでかつこ悪いあなたのことが好き」

「…………は？」

「え、なに。『は？』って何」

「いやいまなんて言つた？」

「好き」

恥ずかしいんだから何度も言わせないで、と彼女は唇を尖らせる。

「正気か?!」

「流石に聞き捨てならない。キレるわよ」

「もうキレてない?!」

ぎやーすかと、先ほどまで泣いていたのはなんだつたのかというような具合に言い合いを始める。

「……はあ」

彼女はいつものようにため息を吐いていた。

馬鹿だなあ、という目でぼくを見ていた。

「最後にもう一回だけ聞くけど、何か言うことは?」

「え、あ。好きです!」

「それだけ?」

「付き合つてください!」

「はい正解」

こんな女の子に誘導されなくとも言つてほしい、と呆れた目を向けられる。
いやこの状況でんな無茶な、と思いつつ、未だに頭がぐるぐると迷走していた。

「……乙女心もてあそんだ罪、一生かけて償つてね?」

ぼくは、「はい」と述べて頷いた。